

## 北東ウガンダ踏査報告

アミン政権の軍事独裁期以降、内戦内乱を繰り返してきたウガンダは、1986年ムセベニの国民抵抗軍が政権を獲得して以来、急速に国家再建を成し遂げ、今日では政治的・経済的にも東アフリカで最も安定した国家となっている。しかしそのウガンダのなかにも、社会的に不安定な地域がある。たとえば、反政府ゲリラが活動をつづける西部国境と、北部のスーダン国境である。外国人が入りにくいのは、こうした反政府武装集団の活動地域以外にもある。それが北東ウガンダである。ジエ、ドドス、カリモジョンといった乾燥地帯の牧畜民は今日、国際紛争による武器流通の日常化の影響を受け、近代銃火器で武装して家畜の略奪を頻発させている。この地域に近年、牧畜調査の研究チームが本格的な調査を試みようとしている。今回は、そのチームリーダーでもある太田至会員から、踏査報告を寄稿していただいた。

### 過剰な農耕—ウガンダ北東部・農牧社会の予備調査から—

太田 至

#### あこがれの土地

アフリカの地図をひろげてみると、多くの国境がいかにも人工的な直線で区画されているのが目につくが、ケニアの北西部では、ウガンダとのあいだの国境線が複雑に曲がりくねっている。この国境線は、南北にのびる大地溝帯のエスカープメントにそってならんでいる三角点をむすんで、ひかれているのである。ここで大地はウガンダからケニアにむかって急激におちこんでおり、標高差は600～1000メートルほどもある。

その低地側の半砂漠で、私は牧畜民トゥルカナの人びとと共に暮らしてきた。

よく晴れた日に西のかなた、ウガンダの方角に目をやると、青く霞がかった山塊が屏風のようにそびえていた。トゥルカナの人びとは「あの山の上では雨がたくさん降り、鬱蒼とした森がある」と語った。雨が近い季節には、その山塊の上で遠く稲光が夜空を切り裂くのが見えた。4.50キロメートル、いや、もっと遠くだったかもしれない。「むこうは雨か。ここは、まだなのに」と、私たちは羨望をこめてその稲光をながめていた。雨は大地を緑に変え、十分に草をはんだ家畜はまるまると太り、つぎつぎに子供を出産する。そして人びとはたくさんのミルクを



2頭の去勢ウシにスキを引かせてゴマの播種をするカリモジョン。

手に入れることができる。雨は恵みをもたらす。トゥルカナの地が、矮小化した灌木がまばらにはえている半砂漠であるだけに、エスカープメントの上の「鬱蒼とした森」というイメージは強烈だった。西のかなたの山塊をながめる私の脳裏には「山のあなたの空遠く・・・」という人口に膾炙した詩の一節が、陳腐にも浮かんできたものだった。いつかは「幸い住むと人のいふ」その土地をおとずれてみたいという思いが、私の心の底に棲みついた。

その機会は、ついに1998年の夏にやってきた。ウガンダの北東部には、カリモジョン、ジエ、ドドス

といった人びとが住んでおり、農耕もおこなうが、つよく牧畜に依存した生活を送っているといわれてきた。これまでに私たちは、ケニア北部でいくつかの牧畜社会の現地調査を続けてきたが、地域をウガンダまで広げてみよう、そのためには、まず広域の予備調査をやってみようという案がまとまった。それに参加したのは、弘前大学の北村光二さん、静岡大学の河合香史さん、そして京都大学の波佐間逸博さんと私の4人。8月1日から24日まで、2台の車を連ねた約3週間の旅だった。



カリモジョンの集落。収穫されたヒマワリの花から種を集める。

### 一面の緑の畑

ウガンダの首都カンバラでマケレレ大学の研究者に会ったり、政府に調査許可を申請するために数日をついやし、私たちがカラモジャ地方に足をふみ入れたのは8月9日のことだった。この日に私たちは、エルゴン山中腹のシピという町からモロト県の県庁所在地モロトまでを走破している。

道中、驚いたことにあたり一面が畑だった。ソルガムやヒマワリが目についたが、トウモロコシもあった。そして家畜の姿はほとんど見あたらなかった。牧畜を主たる生業としている人びとの地にやってきましたつもりだったのに、いったいどうしたことだろう。

翌日、この地域の行政官や地方議会議員に会い、訪問の目的を説明して滞在許可を得たあと、私たちは8月11日からモロト県の西部を見てまわる旅に出かけた。そしてナバック山の南側のナブエルという地域で二泊したのだが、そこでさらに多くの種類の作物に出会うことになった。ソルガム、ヒマワリ、トウモロコシに加えて、ゴマ、カボチャ、ピーナッツ、タバコ、ヒョウタン、インゲンなど三種類の豆類、そしてキャッサバも植えられていた。二頭の去勢ウシに鋤をひかせて土地を耕しながらゴマを播種している男性の姿もあった。

集落では、収穫後のトウモロコシが地面にひろげられていた。ここで乾燥したあと、高床の小屋で保存する。また、収穫してきたヒマワリの花を天日でかわかし、短い木の棒でたたいて種を落として集める作業をしている人びともいた。ヒマワリの種は近

くの町まで運び、機械を使って油をしぼったあとで売却するのだという。こうした作業をしているために、集落内には作物の茎や葉などの残り屑が雑然と散乱していた。こんな風景も牧畜社会ではあまり見ないものだ。集落にはヤギやヒツジはまったくなくて、わずかに数頭のメスウシだけが搾乳のために小屋の中につながれていた。家畜は今、もっと西や南にある家畜キャンプにいるのだという。

この集落に住んでいたのは、カリモジョンのサブ・グループであるビアンの人びとだったが、北に30分ほど歩いたところには、別のサブ・グループのボコラに属する人びとの集落もあった。どちらの人びとも農耕をおこなうために数年前に移住してきたのだという。この新しい村は、どちらかといえば特殊な集落だったのかもしれない。しかしながら、その後には私たちはモロト県の北に隣接するコティド県もたずねたが、そこでもまた、あたり一面が畑という風景を見ることになった。コティド県ではジェヤドドスの人びとが、トウモロコシ、ソルガム、ヒマワリのほかに、シコクビエとトウジンビエも栽培していた。

### 農耕と牧畜

「山のあなた・・・」では、豊かな畑作が展開していた。その畑はうねうねと小さな起伏を越えながら、見渡すかぎりにもどこまでも続いていた。しかしながら、この緑の絨毯のような畑を目の前にして、私たちはどこか「過剰な」感じ、「やりすぎじゃ

ないの?」といった感じをいただいていた。畑には柵もないところがほとんどで、「とにかく播種できる場所は全部使ってみた」といった風情なのだ。この地域のジェの農耕についてはガリヴァーが1951年に調査している(Gulliver, 1954)。その時代の様子を少しみてみよう。

まず作物の種類だが、中心となっていたのはソルガムで全体の95%を占めており、それ以外にはトウモロコシ、シコクビエ、タバコ、ピーナッツが栽培されていた。そして農作物は、人びとの食生活のうえで畜産物におとらず重要だった。とくに乾期の後半には、人びとはほとんど完全に穀物に依存して生活していたという。

農作業の大部分は女性がこなす。男性はそれを補助するにすぎない。収穫した作物をどのように使うかについて采配をふるうのも女性たちである。すなわち、男性がウシを中心とした家畜の世界と結びついているのに対して、女性は農耕にかかわる世界と深いつながりをもつ。ジェの人びとは「男性はウシを所有し、女性は畑を所有する」「ソルガムは女性のウシである」と語る。畑を所有しているのは原則として女性で、一人あたり平均3カ所ほどの畑をもっており、ふたつは休閑中である。母親の畑は娘が相続するのだが、娘が婚出して遠くに住んでいる場合には、僚妻や息子の妻などが相続する。未開地は誰が開墾してもよく、クランなどの集団が特定の土地に対する権利をもっていることはない。ただし1950年に牛耕が導入されて以来、男性が耕地を所有し始めており、耕地が拡大しつつある。まだ未開地も豊富にあるのだが、過耕作によるエロージョン

も見られるし、人口が増加しているために、近い将来には土地不足になるかもしれないと、ガリヴァーは書き残している。

その時代から現在までの40年間には確実に人口も増えたとし、鋤も普及して耕地面積もひろがったにちがいない。ただし、ガリヴァーは「5年に2度」は農作には十分な降雨がないと述べている。また、カリモジョンを調査したダイソン・ハドソンによれば、降雨が不安定なために「4年に一度は畑での努力は徒労に帰し、まったく収穫がない」という(Dyson-Hudson, 1966)。こうした自然条件のもとでは、人びとは農耕を不安定で頼りないものと感じているだろう。一面の畑を目の前にして私たちが「どこか過剰だ」という印象をもったのは、「どれだけ収穫があるかわからない」という前提で人々が播種した作物が、すべて運良く生育していたためかもしれない。ドドスでは河合香吏さんが、そしてカリモジョンでは波佐間逸博さんが長期の現地調査を開始している。このあたりの事情も、もうすぐ明らかになるだろう。

#### [参考文献]

- Dyson-Hudson, N. 1966. *Karimjong Politics*. Oxford University Press  
Gulliver, P. H. 1954. *Jie Agriculture*. *Uganda Journal* 18(1): 65-70.

(おおた\* いたる

京都大学アフリカ地域研究資料センター)

#### 第14回国際エチオピア学会のお知らせ

早いもので私たちが、第13回の大会を京都で開催してから、4年が経とうとしています。今回の開催地は、ローテーション通りアジスアベバで、今年の11月6日から11日まで開かれます。先日、アジスアベバ大学エチオピア研究所から、今号のニュースレター41頁に掲載した書類がファックスで送られてきました。14回大会への参加希望者の報告題目と要旨です。

会員の皆さまもぜひふるってご参加ください。